

白氏文集の偈文

——「六讚偈ならびに序」——

藤井良雄

はじめに

白居易は唐代詩人の中で、盛唐の王維（字は摩詰）と並び「好佛」の詩人とみなされている。彼は自作の詩に『維摩經』などからの言葉を、その基づくところをわざわざ自注するほどに仏典に造詣が深いことはいまでもない。それは若かりし時から、母親の影響からか仏典に親しんできて、「人間 此の病 治すに藥なし 唯だ『楞伽』四卷の經有るのみ」（「見元九悼亡詩因以此寄」〔80〕）のように詩中でも、よく詠じることが多いことから推察できる。

本稿で訳注した白居易の「六讚偈」（『白氏文集』卷七十三611-3616）は、加地哲定が彼の『中国佛教学研究』（昭和四十年）に章立てした「第四章 正統的文学としての佛教学」において「佛教に対する理解をもち、更にまた

佛教の境地にも味到したと思われる詩人を数名を挙げて、その人の作品について、佛教学の立場から評論を試みてみることにする」として「王維の詩、寒山子の詩、柳宗元の文」の唐時代人を列挙し、その締め括りとして「白居易の偈文」について述べた最後に引用され言及されているものである。

この「白居易の偈文」は、まず貞元十九年（802）、白氏が年三十二歳のとき、凝公大師から「観・覺・定・慧・明・通・濟・捨」の八言を教えられ「八漸偈」を作ったことについて評論が始められ、「結局佛教の真髓たる自證他化を八偈によつて整理したもので、樂天の佛教への理解はこれによつて尽くされている」と、白居易の佛教信仰の深奥までの理解への端緒となすべきものと思われる。さらに、加地哲定は次のように述べて、

かくして大和八年夏、彼が六十三才の時東都（洛陽）

長壽寺に於て大必蜀道崇・存一・惠恭等六十、及び優婆塞士良・惟俟等八十人と共に八戒をうけてよりは兜率陀天、彌勒淨土に往生せんことを願ひ、その後六十八にして半身不隨の風痺に罹り、愈愈人生の末期を自覺し……六十九才頃から西方淨土に熱烈な帰依を感じて至つた。……樂天の生涯はこういう状態であつたので結局佛教によつてささえられ、佛教によつて心情が陶冶され、遷謫に遭うても遇う處に順応して意に介せず、自ら慰めて逍遙自適した。佛教といつても最後は淨土往生の帰依者であつた。前記の「八漸偈」や自嘆の詩に禪的な要素あり、また「讀禪經」の詩に、須知諸相皆非相 須らく知るべし 諸相は皆相に非ざるを、

若住無餘却有餘 もし無餘に住せば却つて有餘。
言下忘言一時了 言下に言を忘れて一時に了す、
夢中說夢兩重虛 夢中に夢を説きて兩重虚し。
空花豈得兼求果 空花 豈に兼ねて果を求むるを得んや、
陽焰如何更覓魚 陽焰 如何ぞ更に魚を覓めん。
振動是禪禪是動 振動は是れ禪 禪は是れ動
不禪不動即如如 不禪不動即ち如如。

（白氏文集卷六五・354）
のような禪の悟境の心懷を詠じたものもあるが、結局

信仰としては淨土願生であつた。そこで樂天の作品には讀偈箴銘詩文など数多ある中、佛教文學として最も勝れた価値があり且つ特色のあるものは矢張り偈・讀の類であらう。

と指摘する。加地哲定は続けて白居易の弥勒と弥陀の讀を引用し、白居易は弥勒信仰と阿弥陀信仰と「兩方の信仰を同時に持つても矛盾も感ぜず、要は現生の拔苦與樂、あとは佛任せの他力本願に安心していたものであらう」と述べて、最後にここに訳出する「六讀偈」序文を引用して云う。

樂天に取つてはこの偈こそ佛法僧に対する至心發願の畢生の作品であり、文學を以て生命とする者が文學を以て三寶に報謝し奉り、それによつて未來讀佛の縁となさんとする誠に尊く殊勝なる讀偈である。これこそ樂天自らが佛教と文學とを内面的に融合せんとしたところの佛教文學といつてよい。

と高く評価している。ただ、加地哲定は、高野山の住人で仏教について身近であり、白居易の「六讀偈」の原文に返り点だけを附した形で示されるだけで、後学の者にとつて非常に理解し難いところがあるので、この「懺悔發願の明文」を現代人にも分かりやすく平易に訳注を附して再掲することにする。この「六讀偈」は、會昌元年（八四二）に作つたものであり、時に白居易は丁度七十歳、東都洛陽で官位が太子少傅分司であつた。なお、この偈文は、『緇門警訓』

卷六（大正新修大藏經 第四十八冊・以下、丁四八と略称する）にも収録され、偈文はすべて八字句で示されている。題は「白侍郎六讃偈並序」である。

『白氏文集』 卷七十 「六讃偈 并序」 訳注

樂天常有願、願以今生世俗文筆之因、翻爲來世讚佛乘轉法輪之緣也。今年登七十、老矣病矣。與來世相去甚邇。故作六偈、跪唱於佛法僧前、欲以起因發緣、爲來世張本也。

（『白氏文集歌詩索引』の作品番号3611）

樂天常に願有り、願はくば、今生の世俗の文筆の因を以て、翻して來世の讚佛乘・轉法輪の縁と爲さん。今年七十に登り、老たり病たり。來世と相去ること甚だ邇し。故に六偈を作り、跪して佛法僧の前に唱え、因を起こし縁を發するを以て、來世の張本と爲さんと欲す。

注

○これは「六讃偈」に付せられた序文である。ここに見える「願以今生世俗文筆之因、翻爲來世讚佛乘轉法輪之縁也」という本願は、同時期の白居易の文章中に現れている。その一は「蘇州南禪院白氏文集記」（卷六一・開成四年（八三九）作・2955）に、「且有本願、願以今生世俗文字、

放言綺語之因、轉爲將來世世讚佛乘、轉法輪之縁也」とある。その二は「香山寺白氏洛中集記」（卷七十・開成五年（八四〇）作・608）に、「我有本願、願以今生世俗文字之業、狂言綺語之過、轉爲將來世世讚佛乘之因、轉法輪之縁也」と繰り返されている。白居易の本願の切実さが実感できるものである。因みに、『暮らしの中の佛教語小辞典』（宮坂宥勝1995）によれば、佛教語としての本願は、「サンスクリット語のプールヴァ・プランドーナ（*purva-pranidhana*）の訳語。ただし、プランドーナだけでも本願と訳す例が『觀無量壽經』にある。文字どおりには以前からの願いの意。仏が過去世において一切衆生を救うことを願ったこと。阿弥陀如来がまだ法藏菩薩として修行をしていたときにたてた四十八願は有名。……さらに一般に宿願、宿志を本願という」とある。また「來世」への期待が白居易のこの時期の詩作にも次のように詠ぜられる。

來世緣會應非遠 來世の緣會に遠きに非ざるべし

彼此年過七十餘 彼（雲臯上人）此（白居易）年は過ぐ

七十余り

（「後集を送り、兼ねて雲臯上人に寄す」3598）

【語釈】 ○讃偈…讚仏偈のこと。偈とは、一般に韻文体の歌謡・聖歌・詩句・偈文・頌文のこと。讚仏偈、歎仏偈ともいう、一般的に、仏の相好功德などを讃えた偈頌で

四言・五言・七言などの区別がある。なお、阿弥陀仏が因位中（さとり以前）の法蔵比丘であつた時、その師の自在王仏の功德を讀えた偈で（『佛說無量壽經』卷上、寶積部・T二二）、「光顏巍巍」以下の八十句を讀仏偈という（岩波文庫『浄土三部經（上）』一五〇頁）、浄土教諸宗派で広く読誦されている經文である。禪宗の祝聖、廻向にも、讀仏偈がある。○讚佛乘…佛乘を讚える偈。佛乘、乗とはのりものの意。さとりに赴かせる教えをいう。仏乗とは、一乗のことである。仏教の眞の教えは唯一で、その教えによつてすべてのものがひとしく仏になると説く教である。『法華經』明難品や『勝鬘經』一乘章にも仏に一乗を説き、一乗によつて仏となることを説く。一乗は、仏乘、一仏乘、一乗教、一乘究竟教、一乘法、一道などともいう。○轉法輪…法輪を轉じること。轉梵輪ともいう。仏が說法して衆生を得道させること。八相成道の一。仏が教法を説いてあやまつた信仰や煩惱をうちくぐくのを、轉輪聖王が武器としての輪宝をもつて全世界を降伏させるのにたとえたものの、「そうした武器による世界の支配統一ではなく、仏の眞理の教えがひろまることによつてすべてが導き救われる意味で、法輪という。ダルマ・チャクラ (dharma-cakra) の訳が法輪」（『暮らしの中の佛教語小辞典』）。○起因發縁…因縁を發生する。因、結果（界）を引き起こすための直接的内的原因を因という。縁、狹義では、結果（界）を

引き起こすための直接的内的原因を因というのに対して、これを外から助ける間接的原因を縁というが、広義では両方合わせて因と縁ともいう。広義の縁は因縁・等與間縁・所縁縁・増上縁の四縁に分類される。○張本…あらかじめ後のために素地を作つておくこと。『釋氏要覽』卷三（T五四）に「白氏六帖」を引用して云う。「今釋子二師有德行名業又宜識之。爲僧傳之張本也。」

【訳文】 樂天にはいつも本願があり、どうか今生の世俗的文筆の因が、將來世世の讀仏乘・轉法輪の縁になりますようにと願っています。今年すでに七十歳になったので、老いぼれ、病氣がちであり、來世に非常に近着いています。だからこの六首の偈を作り、仏法僧の前に跪いて拝誦し、これに拠つて因縁を起こして、來世のための素地としたいのです。

讚佛偈

十方世界、天上天下、我今盡知、無如佛者。堂堂巍巍、爲天人師。故我禮足、讚歎歸依。

(3611)

十方世界、天上天下に、我、今、盡く知る、佛に如く者無きを。堂堂巍巍として、天人師たり。故に、我禮足して、讚嘆歸依す。

【語釈】 ○ 讚佛偈…歎仏偈ともいう。この「讚佛偈」

は『佛本行集經』卷四（T三）にある、釈尊が過去世に弗沙仏を讚歎した偈文「天上天下無如佛。十方世界亦無比。

世間所有我盡見。一切無有如佛者」を踏まえる。○ 十方世界…東西南北、四維、上下の十方に有情の世界が存在し無量無辺である全宇宙をいう。○ 天上天下…天上は天三界すなわち天下・人間界の上にある天界。すべての世界をいう。○ 堂堂巍巍…佛祖の擬態を描写する語。『佛說無量壽經』卷上（T十二）に、「姿色清淨 光顏巍巍」とある。

○ 天人師…佛の十号の一。『佛說無量壽經』に世自在王如来・應供・等正覺・明行足・善逝・無上土・調御大夫・天人師・佛・世尊と名づける。『無量壽經義疏』卷上（慧遠撰 T七三）に「天人師者、能授與法、能以正法近訓示天人、名天人師」とあるのを踏まえる。○ 禮足…宗教儀式。佛に対する敬意を払うために、信者が自分の顔面を佛の足元に頻ずりすること。『無量壽經』（T九）に、「即從坐起、來詣佛所、頭面禮足、遶百千匝」とある。○ 歸依…歸入、歸救の義。『佛說無量壽經』卷上に、「釋梵捧持、天人歸依」とある。

【訳文】 十方世界、天上にも天下にも、仏さまと比べられるものはないと、今、私はすっかり分かった。高山のように気高く、威儀尊嚴なる天上世界・人間世界の師である。

だから、私は仏の足に礼拝して、仏を賛嘆し帰依するのだ。

讚法偈

過見當來、千萬億佛、皆因法成、法從經出。是大法輪、是大寶藏、故我合掌、至心迴向。

(3612)

過・見・當來、千萬億の佛、皆法に因りて成り、法は經より出す。是れ大法輪、是れ大寶藏。故に我合掌し、至心もて迴向す。

【語釈】 ○ 過見當來…過去・現在・未來の三劫をいう。

『念佛三昧寶王論』（T四七）卷三「萬歲同歸皆成三昧門第二十」に、「無有一佛在過去、亦無現在及當來、唯此清淨微妙禪、彼不可言證能說」と過去・現在・當來がみえる。彌勒菩薩のことを當來導師という。彌勒は今より五十六億七千万年を経てこの世に成道して衆生を化導するという。

○ 千萬億佛…ここは前句と合わせて、三劫三千佛のことである。過去・現在・未來の三劫にそれぞれ一千佛があつて世に現れるので三千佛となる。『俱舍論』に、千は数の單位の第四、萬は第五と記している。億、佛典には千万のことをいう。『華嚴經搜玄記』（T三五）に、「西国數法有三種億、一爲百萬、二爲千萬、三爲萬萬」とある。○ 法輪・寶藏…衆生の苦難を救済する佛の妙法の喩え。『廬山

蓮宗寶鑑」卷七「慈照宗主示念佛人發願並序」(T四七)

に、「萬法從心生、萬法從心滅。我佛大沙門、常作如是說……與佛不相遠、應當坐道場。轉於大法輪、普度無邊衆……貧人自不知、家內有寶藏、逐日趁客作、求衣食自濟。今此念佛人、其意亦如是……」とある。○至心迴向…衆生が真心を持つて迴向すること。至心、淨土教で往生を願う心という。阿弥陀仏が衆生に迴向すること。阿弥陀仏四十八願の内に第二十願は至心迴向願、『往生禮偈讚』卷一(T四七)に、「至心迴向 流浪三界内、癡愛入胎獄。生已歸老死、沈沒於苦海。我今修此福、回生安樂土。迴向已至歸命阿弥陀佛」とある。

【訳文】 過去、現在、未來の三劫に現れる千万億の仏は、皆、法に拠つて仏になり、その法は經典から出てくる。(經典は)大法輪であり、大宝藏であるから、私は合掌して、専心迴向するのだ。

讚僧偈

緣覺聲聞、諸大沙門、漏盡果滿、衆中之尊。假和合力、求無上道。故我稽首、和南僧寶。

(3613)
緣覺聲聞、諸の大沙門、漏盡き果滿ち、衆中の尊なり。和合の力を假りて、無上道を求む。故に我稽首し、僧寶を和

南す。

【語釈】 ○緣覺聲聞…緣覺僧と聲聞僧のこと。緣覺、一人で悟りを開いた人。聲聞、出家修行僧。ここの緣覺聲聞は出家修行僧を指す。『佛祖歷代通載』卷三二(十六)革罷僧道衙門(T四九)に、「以四向一坐而證成三生百劫而彰號者、緣覺聲聞也」とある。○大沙門…佛道修行者。修行が深い法師。○漏盡…諸の煩惱を断ち尽した状態。涅槃の境。○果滿…果報が満ちること、この派生語として果滿轉があるが、これは六種の轉位中の究竟位のこと。『廬山蓮宗寶鑑』卷一「彌陀釋迦本願因地」(T四七)に、「今既果滿、號阿彌陀、故現淨土。寶海大臣、願於穢土、成熟有情。今已果滿、號釋迦牟尼。於此濁惡世中、成佛菩提。」とある。○和合力…和合とは梵行者が互いに和合愛敬することで、六種あるので六和敬といひ六和合という。出家者が和合協力して背くことのないものを和合僧という。○無上道…この上なく優れた道または悟り。『佛爲心王菩薩說投陀經』卷上(T八五)に「其年雖小常樂出家。學無上道(初入定門、道未成。名爲年小・心無間念曰定。從定起惠。名爲出家。學者學性平等。故曰無上道也)」とある。○稽首…頭を足につけて礼拝する。仏教礼法の一種。○和南…稽首・敬礼すること。『金光明最勝王經疏』卷六(T三九)に、「法爲佛師故先讀法、佛能起說是教之主故。

次讚佛、起慍淨心策殊勝業。虔誠頂拜名爲敬禮。梵男聲呼云伴談、女聲呼云伴底。此云敬禮訛云和南。」とある。○僧寶…三寶の一つ。修行者の集いという寶。佛法を修行する僧団。

【訳文】 緣覚僧や聲聞僧、大法師たちは、漏が尽き果報が満ちた、衆生の中で尊者であり、和合の力をかりて、無上の道を求めている。だから、私は稽首して、僧宝に敬礼する。

衆生偈

毛道凡夫、火宅衆生、胎卵濕化、一切有情、善根苟種、佛果終成。我不輕汝。汝無自輕。

(3614)

毛道の凡夫、火宅の衆生、胎卵濕化、一切有情、善根苟しくも種うれば、佛果終に成らん。我汝を輕んぜず。汝も自ら輕んずることなかれ。

【語釈】 ○毛道凡夫…凡夫のこと。毛頭、毛道ともいう。愚かな凡夫の意。『一切經音義』卷十(Ｔ五四)に、「毛道…此云毛婆羅、此云愚、以毛與愚梵音相濫故誤譯此、爲毛意。翻爲毛道或云毛頭…」と。○火宅衆生…衆生がこの世で苦しんでいるのを、焼けたつたある家の中にいることの喩え。火宅、『法華經』譬喻品に、「三界無安猶如火宅」

と。煩惱や苦しみに満ちたこの世を、火に焼けている家に喩えている。また白居易「自悲」詩(106)に「火宅煎熬の地 霜松 摧折の身」とある。○胎卵濕化…四生のこと。生物の生まれる相状に四種あり、胎生・卵生・濕生・化生をいう。『法華文句記』卷十(Ｔ三四)に、「四生者、謂胎卵濕化」とある。○善根…善行、功德のもと。『隨想論』卷一(Ｔ三三)に、「善則隨三事恒流。三事者、一三善根、二餘物、三衆生、三事中若一事不具、善則不復流」とある。○佛果…修行の因によつて到達する仏陀の位。佛果位。結果として、悟つて佛になつた状態。佛因の對。○我不輕汝…『法華經』(Ｔ九)常不輕菩薩品の偈に見える。常不輕菩薩は比丘・比丘尼および在家の人々を見れば、直に礼拝し讚歎して、「われ汝等を敬ひ敢へて輕んぜず。汝等當に菩薩道を行じてみな佛とならん」という。(岩波文庫『法華經』下・一三六頁)

【訳文】 愚かな凡夫や、火宅の衆生や、胎生・卵生・濕生・化生といった、すべての有情は、「誰でも」この世でもし善根を種えれば、終には仏となれる。わたしは君らを輕ろんじないし、君らも自分のことを自ら輕蔑卑下してはいけない。

懺悔偈

無始劫來、所造諸罪、若輕若重、無大無小、我求其相、中間内外、了不可得。是名懺悔。

(3615)

無始劫來より、造りしところの諸の罪は、若しくは軽く若しくは重きも、大と無く小と無く、我其の相を求む。中間内外、了に得べからず。是れを懺悔と名づく。

【語釈】 ○懺悔偈…この「懺悔偈」は『五燈會元』『東土祖師第二祖慧可』や『景德傳燈錄』『第二十九祖慧可大師』の条の懺悔の話を踏まえていると野口善敬和尚（臨濟宗長性寺）よりご指摘いただき、さらに本「六讚偈」訳文についても匡正いただいた。『景德傳燈錄』は丁度「第二十九祖慧可大師」まで、我々の研究会の成果である「和訳『景德傳燈錄』」があるので、該当部分を以下にしめす。

北齊の天平二年（五三五）、一人の居士が（達磨の衣鉢を継いだ慧可のもとに）やってきた。年は四十を過ぎようかというのに、姓名を名乗りもせず、やってきて礼拝すると、師（慧可）に尋ねて言った、「弟子は風恙（ふうしやう、精神の病）にとりつかれています。どうか和尚、私のために懺悔してください」と。師は言った、「罪を持ってこい。おまえのために懺悔してやろう」と。居士はしばらくしてから言った、「罪を探しましたが見つかりません」と。慧可は言っ

た「わたしはおまえのために懺悔してやった。しつかりと佛・法・僧の三宝に帰依すればよい」と。「居士は」言った、「今、和尚にお目にかかったので、僧については分かりました。しかし、佛・法の二つは一体どんなものでしょうか」と。師はいう、「心は佛であり、心は法である。法と佛とは別々のものではない。僧という寶も同様である」と。居士はいった、「今日、私はやっと気付きました、罪の实体は、内にあるのでも、外にあるのでも、その中間にあるのでもなく、ちょうど心（に实体がないの）と同じであり、佛と法とは別々のものではないということに」と。（和訳『景德伝灯録』（四）第二十九祖慧可大師『活水日文』第三十七号・一九九九・石田和夫訳稿）『景德傳燈錄』卷三に「第二十九祖慧可大師者、武牢人也。……有一居士、年踰四十、不言姓氏。聿來設禮、而問師曰、「弟子身纏風恙、請和尚懺罪」。師曰、「將罪來與汝懺」。居士良久云、「覓罪不可得」。師曰、「我與汝懺罪竟、宜依佛法僧住」。居士曰、「今見和尚已知是僧。未審何名佛法」。師曰、「是心是佛。法佛無二。僧寶亦然」。居士曰、「今日始知罪性不在内不在外不在中間、如其心然、佛法無二也。」である。○無始劫來…その始めもわからない遠い昔から、また久遠以来、曠劫以来ともいう。『景德傳燈錄』卷十に「懷讓第三世下・前池州南泉普願禪師法嗣」に、「僧問、諸佛師是誰。師云、從無始劫來承誰覆蔭」とある。○所造

諸罪…『蘇悉地羯羅經』「供養品第十八」(T一八)に、「今

對諸佛菩薩。誠心懺悔所造衆罪。如諸佛知、並皆懺悔、起

至誠心」とある。○若輕若重…『禮懺文』(T八五)〔No.2855〕

卷一に、「從今以往、改往修來、更不敢造、所有罪障、若

多若少、若輕若重、今日今時、一念之中、一切罪障、盡皆

消滅」とある。○無大無小…『法華經』(T九)卷二「信

解品第四」(岩波文庫『法華經』上・二五六頁)に、「無生

無滅、無大無小、無漏無爲、如是思惟、不生喜樂」とある。

○中間内外…『景德傳燈錄』卷二十二「韶州白雲祥和尙

伝に、「莫は無辺中間内外已否。如是會解。即大地如鋪沙

去。此即他方相見」とある。前掲の『景德伝灯録』卷三

「第二十九祖 慧可大師」条参照。○了不可得…了、つい

に。『景德傳燈錄』卷三「菩提達磨傳」に、「師曰、將心來

與汝安。曰、覓心了不可得。師曰、我與汝安心竟」とある。

【訳文】 遠い昔から、作られたいろいろな罪は、軽いも

のも重いものも、大となく小となく、私は、中間内外にわ

たつて「その罪の」相を求めたが、ついに得ることができ

なかった。これを懺悔と呼ぶのだ。

發願偈

煩惱願去、涅槃願往、十地願登、四生願度、佛出世時。願
我得親、最先勸請、請轉法輪。佛滅度時、願我得值、最後

供養、受菩提記。

(3616)

煩惱 去らんことを願ひ、涅槃 往らんことを願ひ、十地

登らんことを願ひ、四生 度せんことを願う。佛 出世

の時、願はくば、我 親しむことを得て、最先に勸請し、

轉法輪を請はんことを。佛 滅度の時、願はくば、我 値

ふことを得て、最後に供養し、菩提の記を受けんことを。

【語釈】 ○十地…菩薩が修行すべき五十二段の内、特

に第四十一から第五十位までの地という。いわゆる、歡喜

地・離垢地・發光地・焰慧地・難勝地・現前地・遠行地・

不動地・善慧地・法雲地という十地である。○四生…胎

卵濕化のこと。前出。○佛出世時…出世、佛が世に現れ

る。佛が世に現れる時。○願我得親…親、親近、親しく

なること。『發菩提心經論』(T三十二)卷一「發菩提心經

論願誓品第三」に、「願我得生諸佛國已、常得親近隨侍左

右如影隨行」とある。○勸請…教え請うこと。誠心を持つ

て佛に願つて説法を請ひ、佛が永久に世に住して人々を救

うことを請願する意で、修行上でも最も重視されている。

○願我得值…値は会うこと。佛に会い祭ること。『法華經』

(T九)卷三「妙法蓮華經化城喻品第七」に、「世尊甚希有、

難可得值遇」とある。○菩提記…菩提の予言。『法華經』

(T九)卷二「妙法蓮華經信解品第四」に、「世尊授舍利弗

阿耨多羅三藐三菩提記」とある。(岩波文庫『法華經』上・二二二頁)

【訳文】 煩惱からは去ることを願うし、涅槃には往まることを願う、〔修行して〕十地の高みにまで登ることを願うし、四生を済度することを願う。仏がこの世に現れる時には、願わくはわたしが仏に親近して、最も早く仏に勸請おねがいして、転法輪を請おねめますように。仏が滅度する時には、願わくはわたしが〔その場に〕めぐり合え、最後に供養をし、菩提ぼだいの授記よげを受けられますように。

(ふじい よしお・本学教授)